

異世界でお兄様に
精杯
がんばった結果
殺されないよう、

①



レイフォールド

デズモンド伯爵家当主、王城直
属騎士団所属。マリアの義兄。
隣国の王族の血を引いている。
珍しい闇の魔力を有する騎士団
随一の魔法騎士。小説ではマ
リアを殺し、「血まみれの闇伯爵」
と呼ばれる。

マリア

デズモンド伯爵令嬢。
前世に読んだ小説で断罪される
キャラ「偽聖女」が自分であると
気づき、小説とは違う未来を模
索するが、なぜか聖女の力が発
現してしまう。
おっとりした小心者。

人物紹介



クロエ

ダールベス侯爵の養女。
妖艶な美女で、ダールベス侯爵
の謀略に加担するが……。

ダールベス侯爵

ダールベス侯爵家当主。
王国の実権を握ろうと画策する。
マリアの両親を殺害した黒幕。

エストリール

王太子。
明るく爽やかだが少々チャラい
性格。圣女となったマリアに興味
を示す。

ミル

デズモンド伯爵令息。
マリアの弟。優しく素直で、マリ
アにもレイフォールドにも懐いて
いる。

リリア

マリアの親友。小説では「圣女」
キャラだが現実では圣女の力が
発現しない。面倒見がよく親切
な美少女。



異世界でお兄様に殺されないよう、
精一杯がんばった結果

1

Contents

第 1 話	怖くて強くて、やっぱり怖いお兄様	6
第 2 話	天使と悪魔と被害者で朝食を	24
第 3 話	榛色の宝石 <small>(レイフォールド・ラザルス・デズモンド)</small>	43
第 4 話	死神が死にかけてます	54
第 5 話	二週間ぶりの帰省	70
第 6 話	お客さまがやって来ました	80
第 7 話	王妃様とお兄様と私	102
第 8 話	偽聖女の設定力が強すぎる	114
第 9 話	憧れの人 <small>(ミル・デズモンド)</small>	137
第 10 話	祝賀会	149
第 11 話	お兄様の物騒なスケジュール	186
第 12 話	何もかもが蚊帳の外 <small>かや</small>	203
第 13 話	王宮の異変	212
番外編	お兄様の新しい制服	253



第1話

怖くて強くて、やっぱり怖いお兄様

裸足^{はだし}で私は走っていた。

必死になって逃げ道を探すけれど、涙で視界が歪み、周囲がよく見えない。

石畳の冷たさも、痛みも感じなかった。ただ息苦しく、泥の中にいるように体が重い。

「マリア」

背後からかけられた声に、私は泣きながら振り返った。

「お兄様……」

背の半ばまで伸ばされた艶やかな黒髪、切れ長の黒い瞳。すっと通った鼻筋に、酷薄そうな薄い唇。

まるで月の精霊のように麗しい姿をした男性が、そこに立っていた。

レイフォールド・ラザルス・デズモンド伯爵。

どこか作り物めいた美しい顔を歪め、お兄様はすらりと腰から長剣を抜き放った。その禍々しい黒い長剣に、私は息を呑んだ。

殺される。お兄様に殺される……。

私は恐怖から足をもつれさせ、その場に尻もちをついた。助けを求めて周囲を見回したが、広場に集まった群衆からは「偽聖女」と侮蔑の眼差ししか返ってこない。

「お、お兄様、助けてください」

私は泣きながらお兄様に懇願した。

わかってる、何を言っても無駄だって。聖女を騙った自分が悪いんだって、わかってるけど。

「マリア」

お兄様の瞳が、ほんの一瞬、迷うように揺らいだけれど、

「あの世で慈悲を乞え」

黒い長剣を振りかぶり、お兄様が言った。

ウソでしょ、ほんとに私、殺されるの!?

助けて、誰か、助けて――。

「たすけてっ!」

悲鳴のような声に、はっと私は目を開けた。

動悸が激しく、息がうまく吸えない。汗びっしょりの額に手を置き、私は荒い呼吸をくり返した。

え。私、生きてる……? ということは、

「夢……」

そうだ、あれは夢だ。……ていうか、小説の内容だ。

そう自分に言い聞かせ、私は呼吸を落ち着かせた。

目を閉じて、先ほどまでの夢の内容を思い出す。お兄様に追いかけて回され、王都の中央広場で公

開処刑、という最悪の夢。

この悪夢は、ある意味、夢ではない。近い将来、私の身に起こるであろう予言のようなものだ。私はゆっくり寝返りを打つと、カーテン越しに差し込む美しい朝日に目を瞬いた。

しばらく見なかったこの悪夢を、ここ最近、また見るようになった。

原因はわかっている。私の卒業を控え、進路についてお兄様と毎日衝突しているからだ。

今日も学院から戻ったら、お兄様の執務室に顔を出すように、と厳命されている。

やだなあ、どうせ今日も進路についてしつこく言われるんだろうなあ。

いつもなら、お兄様怖さに自分の意見など秒で撤回しているところだが、今回ばかりはそうはいかない。でなければ私は、今朝の悪夢通り、お兄様に殺されてしまうだろう。

なぜ断言できるかと言えば、私に前世の記憶があるからだ。

前世、私のいた場所は、魔法も魔物も存在しない、不思議な世界だった。そこで私はどう生きてどう死んだのか、その記憶は曖昧でよく覚えていない。ただ一つ、覚えていることは……。

夢の中で長剣を振りかぶるお兄様を思い出し、私はぶるっと身震いした。

絶対にあんな惨殺エンドは回避したい。そのためなら、怒れるお兄様に立ち向かうことくらい

……、でき……なくも、ない、はず！ 死ぬよりはマシだ、たぶん、きつと！

そう自分を奮い立たせ、学院から帰宅後、私はお兄様の執務室に向かった。のだが……。

「おまえはバカか」

うなだれる私に、氷のような声が突き刺さる。

あー、もう心が折れそう……。

お兄様、騎士としての仕事が忙しく毎日深夜に帰宅していたのに、ここ最近はお説教のため、夕食前には屋敷に戻っている。ただだけ私の進路が気に食わないんだ。

「わたしの話をちゃんと聞いているのか？ マリア」

ドスの聞いた声が耳の横で聞こえ、私は飛びあがった。

「あつ、ああ、もちろん、もちろんです！ めちゃくちゃ聞いてます、レイ兄様！」

横を向くと、息がかかるほど間近に、お兄様の顔があった。

ひい！

今朝見た悪夢そのままの、死神のように冷え冷えとした空気をまとった美貌の青年がそこにいた。お兄様は、その退廃的な美貌と傲慢な態度、珍しい闇属性の魔術を使えることもあいまって、『闇の伯爵』と揶揄されている。

ていうかお兄様は、闇だけでなく氷属性の魔術もとっても得意なので、その気になれば、私なんか一瞬で氷像にできる。

これまでの人生、私はなるべく、お兄様の機嫌を損ねないように配慮して生きてきた。

しかし、今回ばかりは引くわけにはいかない。私の今後の人生……というか、端的に言って命の危機に関わるからだ。

だがそれが、淑女にあるまじき選択であることもわかっている。だからお兄様が怒ってるんだけど……。

貴族の子女は、十二歳になると皆すべからく国立魔術学院に入学し、六年後に卒業する。

卒業後、男子はそれぞれ能力や縁故、政治的配慮により、騎士や文官、領地経営などの道に進む。女子はだいたい、二択だ。宮廷に出仕するか、嫁に行くか。

……でも、どっちも私には無理だ。

元々引つ込み思案な性格だったところに、前世異世界の記憶が災いして、私はよく言えばおっとり、悪く言えばどんくさく育った。

権謀術数張り巡らされ、足の引つ張り合いが通常運転な宮廷で働くなんて、絶対に無理。

かといって、貴族の嫁として夫の顔を立て、婚家および実家両方を引きたてるよう、社交術を駆使して貴族間をうまく立ち回るなんてことも不可能だ。

——というようなことを、レイ兄様に訴えてみた。

すると、珍しくお兄様が言葉に詰まった。

「ね？　そう思うでしょ？　私にできると思う？」

「それは……」

レイ兄様の困ったような表情に、私は胸を張った。

フッ。勝った！

「なにを偉そうな顔をしている」

お兄様に不機嫌そうに睨まれた。

「おまえが出仕できぬのも、他家に嫁げぬのも、まあ……仕方がないかもしれん。だが、だからといってなぜ家を出て、フオール地方のような田舎いなかに行かねばならんのだ」

「いや、逆に聞きたいんですけど、出仕もせず嫁にもいかず、家を出ることも駄目なんて、それじゃ私にどうしろって言うんですか？」

「家にいればよい」

お兄様は、当たり前のような顔でしれっと言った。

「いやいや、無理でしょ」

「無理ではない」

真面目な顔で無理を言うお兄様に、私は珍しく正論を説いた。

「学院を卒業したのに、何もせず遊んで暮らせるほど、我が家は裕福ではございません」
デズモンド家は、由緒だけはあるが富とは縁のない家柄だ。

「……たしかに我が家は裕福ではないが、おまえ一人くらい」

「それに、そのような娘はデズモンド家の恥でございます」

「誰がそのようなことを」

「お兄様がおっしゃいました」

「……………」

ウソじゃないもんね。

レイ兄様、ほんとに言ったもんね。

「実家の金を湯水のごとく使い、遊んで暮らすことを良しとする令嬢など、その家の恥だ。そのような令嬢を妻と呼ぶ気はない」って。

そう言つて、王国屈指の権力者である、マイヤー侯爵家からきた縁談をぶつた切つたのは、お兄様ご本人！

ふはは、己の発言には責任を持ちましょうね、お兄様！

「……だが、なぜフォール地方なのだ」

お兄様が食い下がった。

「あのような、都から馬車で一週間もかかるような田舎」

「一応、我が家の領地ですよレイ兄様」

デズモンド伯爵家の、広さだけはある（半分は森）が、人口が少ない（人より猪のほうが多い）

領地、フォール地方。

冬は凍死者も出る寒冷地だが、その分、夏は過ごしやすい。

たまくに貴族の老夫婦が、避暑地として遊びに来ることもある観光地（と行政官は言い張っている）だ。

いろいろ注釈はつくが、私はフォール地方が好きだ。

子ども時代を過ごしたせいか、フォール地方に帰るとほっとするのだ。

「お兄様、私に王都は合いません」

「合う、合わぬの問題ではない」

お兄様がじろつと私を睨みつけた。その迫力に、思わず悲鳴が出かかったのを、私はぐつとこらえた。

いつもならこの辺りで「申し訳ございませんすべて私が悪うございました！」と全面降伏するのだが、今回ばかりはそうはいかない。

私の今後の人生がかかっているのだ。

「お兄様が何とおっしゃろうと、私、卒業後はフォール地方へ参ります！」

高らかに私が宣言すると、お兄様の周囲に暗黒のブリザードが吹き荒れた。

お兄様、マジで人を氷漬けにするのはおやめください！

「そもそも、なぜフォール地方なのだ」

ひとしきりブリザードの嵐を吹き荒れさせ、お兄様のお説教タイム終了かと思いきや、まだ言っている。

夕食がマズくなるからやめてほしい。せっかく、私とお兄様と弟のミル、三人そろって夕食を取れる貴重な時間なのに。

秋からはミルも国立魔術院に入学するし、三人で食事することも少なくなる。

寂しくなるなあ、と感慨深くお肉をもぐもぐしている私に、レイ兄様がさらに言った。

「フォール地方など、王都より給与も待遇も良いとは、とても思えぬが」

「お兄様、食事中ですよ。もつと違う話題を」

「マリ姉さま、僕も聞きたいです」

ミルが思いつめたような表情で言った。

金茶のくるくる巻き毛に、大きな淡い緑色の瞳をした、私よりも美少女顔な弟。

可愛い。間違いなく天使。

ちなみに私は地味な榛色の髪に同じ榛色の瞳をしている。

親しい友人からは「よく見ると美人なのに、地味だよね」と、褒められているのか貶されているかわからない評価を下された。

「フォールなんて、どうしてそんな遠くに行ってしまうのですか？ 姉さまに何かあったら、誰が姉さまを守るのですか？」

そんな、目をうるうるさせてこっち見ないで。私が極悪人みたいじゃないの！

「ミル、そんな深刻に考えないで。フォール地方はたしかに田舎だけど、その分、治安は王都よりいいのよ。お年寄りと子どもが多い地方だからね」

私の言い訳を、苦虫を噛みつぶしたような顔でお兄様が聞いている。

そんな顔したら、料理がマズかったんじゃないかってメイドが気にするでしょうが。

「フォールに行つて、何をするつもりなのだ」

レイ兄様が、背景に暗雲をただよわせながら言った。似合うけどやめてほしい。

「向こうには癒やしの魔術を使える人間が少ないそうなので、治療院で働こうかと」

私程度の魔力の持ち主は、王都には掃いて捨てるほどいるが、田舎にいけば話は別である。魔力があるというだけで重宝されるのだ。

「贅沢はできませんが、私一人ならなんとか食べていけるくらい、稼げそうですね」

実はもう、フォール地方に一軒だけある治療院に問い合わせ、就職後の給与や待遇について、詳しく調べ上げてある。

新しい癒やしの魔術師が来る！ と向こうは大喜びしてくれていた。ありがたい話である。

「……我が家が貧乏だから、フォールに行つて働くということか？」

お兄様が、地を這うような低い声で聞いた。

ミルが怯えるのでやめてほしい。

「いや、貧乏つて……、まあ貧乏ですけど。私はバカですから、お兄様のように飛び級もできず学費がかかってしまいましたし、玉の輿に乗って実家にお金を入れることも無理そうですので、せめて迷惑がからないようにと」

「迷惑だ?!」

くわっと目をむいたレイ兄様の形相に、私とミルは手を取り合つて悲鳴を上げた。

「ももも申し訳ございません！」

「お、お兄さま、僕からも謝りますごめんなさい！」

私たち二人の謝罪に、お兄様がふう、とため息をついた。

ただ息を吐いただけなのに、妙に色っぽいというか、退廃的耽美的な空気がお兄様の周囲にただよるのは何故なんだ。

さつきまで怯えていたメイドまで、頬を赤らめてこっち見てるし。

「あの、お兄様……」

「なんだ」

「伯爵令嬢が平民に交じって働くなど、デズモンド家にとって醜聞になるということでしたら、籍を抜いていただいても……」

「きさま！」

お兄様が椅子から立ち上がった。

「ちよ、お兄様、まだお食事の途中です！」

「だから何だ！」

お兄様はテーブルをまわり、私の横に立った。

「お、おに、おに……」

「鬼だと？」

誤解ですー!!

レイ兄様はテーブルに手をつき、ぐいっと私に顔を近づけた。

「おお落ちて着いて、レイ兄様、どうどう」

「わたしは馬ではない」

レイ兄様の射抜くような眼差しに、私は震え上がった。

「鬼だの馬だの、きさまはいったい、わたしを何だと思っている」
吐き捨てるようにお兄様が言った。

「お兄さ……」



「挙句の果てには、籍を抜けだど？ ハッ！」

お兄様は嘲るように笑い、私の顎をつかんだ。

私を見るお兄様の目が据わっている。

こ、こわい。いつも怖いけど、いつもの十倍くらい怖い。

「これだけは言っておく。きさまをデズモンド家の籍から抜くなど、天地がひっくり返ってもありえぬ話だ。そのようなたわ言、二度と口にするな。もし口にしたら……」

「しませんません」

お兄様は、私の目を見つめながら、ひと言ひと言、刻みつけるように言った。

「いいか、誓ってきさまを監禁してやる。手足を縛ってでも、わたしの魔力すべてを使ってでも、おまえを放しはせぬ。死んでも無駄だ。氷漬けにして、一生わたしの傍に置く」

ヒイヒイ！ なんとという堂々とした犯罪宣言！

「わかったか？」

「めちゃくちゃよくわかりました！」

怖いよ怖いよ、助けておまわりさん！

怯える私に、なぜかお兄様が傷ついた表情をした。

いや傷つくの私のほうでしょ!?

「マリ姉さまは、どうしてフォールに行ってしまうのですか？」

恐怖の食事の後、ミルは私の部屋へ来てソファでごろごろしていた。行儀の悪さを叱るべきなのだろうが、あまりに可愛いので叱れない。

部屋にいるメイドも、にこにこしてミルを見ている。

「……さっきも言ったでしょう？ フォールには働き口もあるし」

「それなら、別にフォールに行かなくてもいいですよね？ 王都なら、フォールよりもっと条件のいい働き先があるのでは？」

ミルの指摘に、私はうぐぐつと言葉に詰まった。

そうなのである。

貴族の令嬢が、国立魔術学院卒業後、嫁にもいかず宮廷に出仕もしないのは、たしかに異例である。

だが、異例ではあるが、皆無というわけでもない。宮廷にまったく縁故のない貧乏貴族の令嬢などは、裕福な貴族や豪商の子女の、家庭教師になるという道があるのだ。

実際、同じクラスの友人にも、二、三人、そうした就職をする子がいた。

だが、それと私のケースはまったく別だ。

あくまで上流階級の枠組みの中で働くのと、平民に立ち交じって働くのとでは、天と地ほどの差がある。

クラスの中でも、「なにも平民と一緒に働かなくても……。良かったら、家庭教師の口を紹介するわよ？」とこっそり耳打ちしてくれた子がいたくらいだ。

みな、私がどんくさいがために、王都で働けそうな口を見つけられなかったのだと憐れんでくれているのだ。優しさがツライ。

だが、私は王都にいるわけにはいかないのだ。

私はため息をつき、ソファに寝そべってこちらを見上げるミルの頭を撫でた。

「いい子ね、ミル。もうお部屋に戻ってお休みなさい」

「マリ姉さま……」

ミルがしょんぼりとソファから降り、私に礼をする。可愛い紳士。私の天使よ。

「お休みなさい、マリ姉さま」

部屋に戻るミルを見送って、私はもう一度ため息をついた。

いっそ、本当のことをぶちまけてしまおうか、と気持ち揺れるのはこんな時だ。

ミルも、レイ兄様も、なんだか言って私のことを気にかけてくれている。

というか、レイ兄様、過保護すぎ。

働きもせず嫁にもいかず、ずっと家にいるとか、貧乏なのにニート推奨してどうする。

まあ、それくらい私のことを心配してるってことなんだろうけど。

だけど……。

さすがに無理だ。

前世で読んだスプラッター小説が、この世界に酷似しているから、その血まみれ破滅エンドから逃れるために王都から離れますなんて、とても言えない。そんなこと言ったら、精神に異常をきた

しているんじゃないかと疑われ、よくて屋敷に軟禁、悪ければどこぞの療養施設に強制隔離だろう。私は、本日何度目かのため息をついた。

そう。なぜかわからないが、私には前世の記憶がある。

ただその記憶はあいまいで、前世の自分がどういった境遇のなんとという名前だったかということなどはまったく思い出せない。

わかっていることはただ一つ。この世界は、前世で読んだスプラッター小説に瓜二つだということだけだ。

あまりに突拍子もない話だし、夢か勘違いじゃないかと何度も疑ったが、それにしても思い当たるが多すぎる。

複雑な出生の秘密を持つ闇の伯爵。デズモンド伯爵家とリヴェルデ王国。気のせいだというには、あまりにも符丁が合う。

しかも、今のところその小説通りに、現実の世界も進んでしまっているのだ。

このままだと、私はいずれ、お兄様に……。

夕食でのレイ兄様を思い出し、私は身震いした。

あれは怖かった！

ここ何年かでも、ベストスリーに入る迫力でした！ さすが闇の伯爵！

小説の中でも、レイ兄様は「闇の伯爵」と呼ばれてたっけ。

それで小説ラスト部分では「血まみれの闇伯爵」にレベルアップしてたな……。

小説ではとにかくバンバン人が死ぬんだけど、スプラッター小説だけあって、その死に方がエグいのだ。特にお兄様が関わりと、そのエグさがグレイドアップする。

私は遠い目になってソファに寝ころがった。

「お嬢様、はしたないですよ」

メイドが私に注意した。

ミルには何も言わなかったせに、私には一瞬の躊躇もないのね。

まあミルと私では、可愛らしさに差がありすぎるから、わかる気もするけど。

……お兄様も、そうなのだろうか。

小説の中で、ミルは命を助けられるのだが、私はお兄様の手によって首を刎ねられ、殺されるのだ。妹を自ら手にかけてことで、お兄様は「血まみれの闇伯爵」と呼ばれるようになる。

小説を読んだ時は、あーこの伯爵、いかにも人を殺しそうだしね、そうか妹を殺すか、鬼畜としか思わなかったけど。

我が身にふりかかる出来事となれば、恐怖しかない。

しかも、お兄様直々につて、なんでよ。なんで伯爵様が、自分の妹をわざわざその手で殺すのよ。いるでしょ、死刑執行人がちゃんと他に！ と、恐怖と理不尽さに泣いたっけ。

というか、私だつて一応、伯爵令嬢なんだから、せめて服毒死とかさ……。

苦しまずに死ぬる、いい葉あるじゃん……。なにも、お兄様みずから妹の首刎ねなくてもいいじゃん……。

前世の記憶を取り戻してから、私はそんな風にやさぐれた。

小説の中では、私は学院卒業一年後に、お兄様に殺されてしまう。まさに今朝の悪夢の通りに。場所は王都の中央広場、助けてえ〜と涙ながらに懇願する私の背を踏みつけ、お兄様は「あの世で慈悲を乞え」と私の首を一刀両断するのである。

ヒドい！ けど似合ってる！

いま現在、お兄様と私の関係は、おおむね良好だと思う。

バカだのアホだの罵られてはいるが、なんだかんだ言って、お兄様が私を気づかせてくれるのを、うっすら感じることもある。

ただ、お兄様は私の首を刎ねたりなんかしない！ とは断言できないというか……、事と次第によつてはやりそうだな、と思わせてしまうあたりが、お兄様の普段の言動を物語っているのだ。



第2話

天使と悪魔と被害者で朝食を

翌日、食堂に現れたお兄様は、相変わらず不機嫌そうな顔で私を睨みつけていた。朝から胃もたれしそうなのでやめてください。

「マリ姉さま、おはよー」

私の天使がやってきた。

「おはよう、ミル」

二人でにこにこしていると、お兄様が低い声で言った。

「マリア、昨夜^{ゆうべ}の話だが」

朝から言うんかい。

「あ、ああの、お兄様、私これから所用がございますの。お兄様もお仕事がおありでしょう？ お話は、お兄様のお仕事がお済みの後でよろしいかしら？」

レイ兄様は仕事人間。ブラック企業もびっくりの仕事漬け生活を送っている。

仕事を持ち出せば、これ以上は食いがれない。ふはは！ と勝ち誇る私を、お兄様は眼光鋭く睨みつけた。

「……いいだろう。今夜、夕食の後にわたしの部屋に來い」

「……ハイ……」

退路をふさがれました。

もそもそとサラダを食べる私を、心配そうにミルが見ている。私は気を取り直し、ミルに微笑みかけた。

「ミル、学院に行くための準備はもう済んだの？」

「うん、そんなに荷物もないし」

「うん、そんなに荷物もないし」
そうだね、家は貧乏だしね。

「学院では、剣技のクラスがあるはずだ。……わたしの剣を持っていくか？ ミル」
お兄様の言葉に、私もミルも驚愕した。

「……え、あの、レイ兄さまの剣って、あの、黒くておっきいあの剣ですか？」

「えええ、剣って、お兄様がいつも持つてる、あの縁起悪そうな剣？」

私の言葉に、お兄様がしかめ面になった。

「……縁起が悪いとは、何をもってそのような」

だって、その剣で私の首を刎ねたじゃん！ とは言えない。

なので私は、その剣について常々思っていた事実を伝えた。

「なんか、真っ黒で雰囲気禍々しいから、縁起悪そうだな、って」

「……………」

お兄様が恨めしそうな目で私を見た。

「えと、あの……、僕にはちよっと重そうなので、遠慮しておきます」

そうだよねえ、あんな呪いの剣みたいなの、イヤだよねえ。とは言えず、

「そうね、ミルには少し大きいかもね。ミルには細剣がいいんじゃないかしら？」

「しかし、屋敷に細剣があったか？」

お兄様の言葉に、私は考え込んだ。

ふつう、男子が二人もいる貴族の家なら、武器もざっと一揃えは用意しておくものだが、我が家は貧乏な上、根っからの文官家系だ。

レイ兄様は騎士団随一の魔法騎士として都にその名を轟かせているが、これはデズモンド家としてはまったくのイレギュラー、異常事態なのである。

しかし、細剣か。

どうだったかなあ、後で倉庫を漁ってみるか、と私が考えを巡らせていると、

「あ、あの……、たぶん、父さまの部屋の机の脇にある、お道具箱に入っていると思います」

ミルが小さな声で言った。

「え、お父様の？　なんでそんなこと知ってるの、ミル？」

ミルはうつむき、ぼつぼつと言った。

「あの……、昔、父さまが僕に教えてくれたの。おまえは私に似て非力そうだから、将来、学院で剣を使う時は、細剣がいいだろう、って。父さまが使っていた剣を譲るから、それを使いなさいって」

その時、お道具箱を開けて見せてくれたの、とミルは言った。

へー。お父様、そんな武器を持つてたのか。ふだんまったく使わないから、道具箱に放り込んでたんだろな。

ていうか、お父様が亡くなる前って、まだミルは六つかそこらだっただろうに、その頃すでにミルの将来を見越してたんだなー。

私が一人頷いていると、

「……そうか。父上が……」

レイ兄様がなぜかうなだれていた。

「父上は、ちゃんとミルのことを考えておられたのだな」

「偶然じゃないですか？　ただ、ミルには細剣が合うだろうっていう見立ては合ってると思いますけど」

私が言うのと、ミルも笑って同意した。

「うん、僕、非力だし、運動苦手だから、レイ兄さまみたいに強くはなれなさそう」

ごめんなさい、とミルがお兄様に謝った。

「ミルはそれでいいのよ」

「そうだ、ミルは頭がいいしな」

レイ兄様が優しく言った。

私の時とは、えらい違いじゃないですか？

「よくあのお兄様に許してもらえたわねえ」

天気の良い昼下がりのカフェで、優しい友人にいたわられながら味わうスイーツは格別である。

「ううん、許してもらえてないの。今日もお夕食後に吊るし上げ……じゃない、お説教されそうだし」

私はチョコレートケーキをつつきながら言った。

あー、うまい。都を離れたらこのケーキを食べられなくなるのが、唯一の心残りだ。

「でも、お兄様のお気持ちもわかるわ。フォール地方は遠いもの」

リリアはふう、とため息をついた。

美しい紫色の瞳に愁いの影が差し、美少女度がさらにアップしている。

サラリと揺れる銀髪も美しい。眼福です。

「大切に守ってきた妹が、そんな遠くに行ってしまうなんて。お兄様もさぞお寂しいことでしょう。……それに、マリアはこんなに綺麗なんだから。それもあってご心配なんでしょうね」

わたしだって心配だわ、というリリアに、私は引きつった笑いを浮かべた。王国一と聞いていい美少女に綺麗と言われるなんて、嬉しさより申し訳なさを感じる。こんな地味顔を褒めていただいてすみません。

「私なんて、デズモンド家の目立たないヤツって立ち位置なんだから、そんな心配なんて必要ないのに」

卑屈でもなんでもなく、お兄様とミルに挟まれていると、自分が綺麗と可愛いのは緩衝地帯になっ



ているなあ、と感じるのだ。

「まあでも……、大切に守ってきたかどうかはともかく、両親が亡くなってから、お兄様は私とミルを抱えて頑張ってこられたと思うわ。学院を卒業するなり、爵位を継ぐ羽目になって苦労しただろうし」

私は昔を思い出した。

両親が亡くなった時、お兄様はまだ十六歳だった。飛び級したので学院は卒業していたが、こちらの世界でも成人前だ。

私は十二歳でちょうど学院に入ったばかり、ミルにいたっては六歳だ。

デズモンド家は由緒ある家柄だが、代々当主が偏屈というかわり者が多く、権力者におもねるということをしなかった。常に空気を読まない忠言をすることから、権力中枢からはつまはじきにされたが、一部のへそまがり王族からはたいそう重用されたらしい。

そうした事情から、デズモンド家は貴族社会で常に中立を保ち、親交のある家は皆無に近かった。そのため、両親が亡くなった時も、急遽当主となったレイ兄様を助けてくれるような人物は、誰もいなかったのだ。

苦労しただろうなあ、というの私でもわかる。

まあ、お兄様なら若さを侮られてマウントをとられても、あっさり返り討ちにしただろうけど。

「……でも、これでいいのよ。いつまでも一緒にはいられないもの」

主に私の命の危機的な意味でも！

「フォール地方は遠いわ」

リリアが悲しそうにうなだれた。

「どうしても行ってしまうの？ 私はてっきり、マリアも王妃様にお仕えするものとはかり思っ
て、楽しみにしていたのに」

うん、まあ、そんな話もあった。

たぶん、お兄様が裏で手を回してくれていたんだろ。じゃないと、特に売りのない私が、王妃付きの侍女になんて推薦されるわけがない。

だからお兄様は、私がフォール地方へ行くと聞いて、あんなに驚いたのだ。

その時のことを思い出し、私はずーんと落ち込んだ。あの時のレイ兄様、なんか「裏切られた！」って顔してた。

そんなつもりじゃなかったんだけど、黙って話を進めたのはやっぱりマズかったかな。

でもでも、小説の中ではレイ兄様、私の首を刎ねたんだよ!!

それは小説の中の出来事であって、現実とは違う、なんて言い切れない。
だって実際、あり得ないと思っていた出来事が起きたのだ。

六年前、両親が亡くなった事件のことだ。

小説の中では、私の学院入学のお祝いのため、私のドレスを選びに街に下りた両親が、馬車に轢かれて亡くなったと書かれていた。

だから私は、ドレスはおろか、手袋から靴にいたるまで、一切両親にはねだらなかつた。

私のために街へ行って、それで両親が死んでしまうのを阻止しようとしたのだ。

だから両親は、街には行かなかつた。

その代わり、ある日、両親はそろって王宮に謁見に上がった。

あの日のことは、よく覚えている。珍しく王宮に行くという両親に、何とはなしにイヤな予感を覚えたけれど、気のせいだと私は自分に言い聞かせた。小説の中で両親が亡くなったのは、街に下りたから。馬車に轢かれたからだ。嚴重な警備の敷かれた王宮で、何の心配があるというのか。

しかし、あの日、両親は殺された。

王宮からの帰りに、何者かに襲われ、命を落としたのだ。

仮にも貴族が、王城からの帰りに殺害されたのだ。単なる夜盗の仕業のはずはない。

王都内で起きた襲撃ということもあり、いくつもの目撃情報があつたにもかかわらず、結局事件は迷宮入りとなつた。

実際に手を下した犯人が捕縛直後に自害したため、その裏で手を引いていた黒幕は、わからずじまいだったのだ。

原因を排除しても、結果は変わらない。

六年前、棺に納められた両親の亡骸を見て、私はそれを痛感した。

「マリア、少し休め」

「お兄様……」

お兄様は、自分も真つ青な顔色をしていたのに、両親の棺を前に呆然と立ち尽くす私を氣遣ってくれた。子どもの頃から、お兄様は何のかのと言いながら、どんくさい私の面倒を見てくれた。不器用ながら、優しく接してくれたのだ。

だから私は、ここが前世で読んだスプラッター小説と同じ世界だと気づいても、両親が死ぬまでは、あまり危機感を抱くことなく、のほほんと生きてきた。

でも、両親の棺の前に、私は初めて無力感とともに恐怖を覚えた。

両親は、小説の通りに私が十二歳の時に死んでしまった。もし、これから先も同じように、小説の筋書き通り現実が進んでいくとしたら、そうしたら、私はお兄様に……。

怖い、と思った。

小説通りに、お兄様に嫌われ、軽蔑されて殺される未来になったら、どうしよう。

私は恐怖とともに、なんとか自分の生き残る道を探そうと決意した。

小説の中で、私の死に関わった人物は三人いる。

お兄様と王太子殿下と、聖女様。

実を言うと、この内、二人とはもう面識がある。

一人目は言うまでもなく、レイ兄様だ。兄妹だからね、しょうがないね！

二人目はというと……、目の前で優しく私を見つめている、美少女リア。後の聖女様である。

学院に入学した後、リアと同じクラスになった時は緊張した。

なるべく関わらないようにしようと思ったのだが、なぜかいつの間にか親友ポジションになって

しまい、頭を抱えたものだ。

でも実際、リリアは本当に優しく可愛くて、突き放すなんてとてもできなかった。

私は可愛いものに弱いのである。

突き放すことができないのなら、自分から離れるしかない。

リリアが聖女の力に目覚めるのは、小説の中ではだいたい学院を卒業してから二、三か月後くらいだから、何としてもその前に王都を脱出したいのだ。

そして、王都を離れば、もう一人の関係者、王太子殿下に会わずに済む。

さすがに王太子殿下に会わなければ、死亡フラグも立ちようがないだろう。

小説の中で、私は無謀にも王太子殿下に懸想し、殿下に目をかけられる聖女リリアに嫉妬する。

その挙句、自らも聖女であると偽って、リリアを陥れようとするのだ。

……ヒイイ、自分で言ってるんだけど、小説の中の私、度胸ありすぎないか。

聖女を偽るなんて、当たり前だが重罪だ。ウソが発覚すれば、間違いなく極刑が科されるつてのに、そこそこ考えなかったんだらうか。

いや、私には無理。お兄様にテストの点数ごまかしただけで、夕食が喉を通らないくらい小心者の私が、そんな国家的犯罪を犯せるわけがない。

……とは思うのだが。

それでも、両親の事件を考えれば、『絶対』なんてない。

いま現在、私は王太子殿下に会ったこともなく、リリアとは親友だが、この先、どうなるかはわ

からない。

どういう経緯でそうなるか、なんて想像もできない。

できないがしかし、このまま王都にいれば一年後、私はこの近くの中央広場でお兄様に背を踏まれながらザシユツと……、ううう、食欲なくなつた……。

うなだれてチョコレートケーキをつつく私に、リリアは苦笑した。

「そんな顔しないで。フォーレルは遠いけど、たまには帰ってくるんでしょ？ ……わたしも会いに行くわ」

「リリア……」

私は涙目でリリアを見つめた。

小説の中の私よ、なぜこんなに優しいリリアを陥れようとしたんだ。そんなに王太子殿下に夢中だったのか。

私のバカバカバカー!!

「おまえはバカか」

リリアと別れた私は、レイ兄様の部屋でまたもやお説教されていた。

癒やしの後にピンチあり。お兄様の氷点下の声音に、私はビビり散らかしていた。

ええ、私はバカです、その通りですよ……。

正面のソファに座つたお兄様は、優雅にお茶を飲んでいる。

私の前にもお茶は出されているが、とても飲む気になれない。いま飲んでも、胃が荒れるだけである。

「聞くところによると、おまえはわざわざ紹介された家庭教師の口まで、すべて断っていたそうだな」

「……ハイ……」

レイ兄様の尋問に、私は素直に頷いた。

ウソをついたところでレイ兄様にはすぐ見破られるので、即座に認めて怒られたほうが、結果的には傷が浅く済むのである。

「なぜそんな真似を？」

「……………」

しかし、これには答えられない。

答えは、とにかく王都にいたくないから、なのだが、それを言ってもそもそもその理由を信じてもらえないだろう。

お兄様はため息をつき、ソファから立ち上がった。そして、身を縮こませている私の前に立ち、その膝をついた。

「……お兄様？」

顔を上げると、どこか苦しそうな表情をしたお兄様と目が合った。

切れ長の黒い瞳が、痛みをこらえるように私を見ている。

てつきり怒っているものと思っていた私は、驚いて目をみはった。

「お兄様、いったいどう……」

「家庭教師の口まで断り、フォール地方で働くことを決めたのは……、王都にいたくないからか？」

お兄様の言葉に、私は息を呑んだ。

なぜそれを！

私の顔を見て、お兄様は苦笑った。

「やはりそうか」

「な、なんで……」

えっ、私、お兄様に前世で読んだ小説のこととか、話してないよね？

え、まさかお兄様も、前世の記憶があるとか？ いやいや、まさかそんな。

混乱する私に、お兄様がつぶやくように言った。

「……おまえは、わたしの気持ちに気づいていたのだろうか？」

えっ、お兄様の気持ち？

血まみれの闇伯爵様のお気持ちですか？ いえ、小説の中で闇伯爵様がお気持ちを表明されたこ

とはないので、私にはわかりかねますが……。

「だからわたしから離れるため、王都を出ようとしたのだから」

ん？ と私は首をひねった。

お兄様の気持ちから、どう飛べば王都脱出につながるのか、よくわからない。
わからない、けど。

「まあ……、はい、結果的には、そういうことに……なる、のでしょうか？」

うん、合ってるよね。お兄様や王太子殿下、聖女リリアから離れるために王都を出るわけだから。
私の返事に、お兄様は深く息を吐いた。

「おまえがどう思っていたかは知らんが。……わたしは、おまえに無理強いするつもりなどなかった」

ええー、いつだって無理強いしてたじゃん、とはなぜか言えない空気感だ。なにこの重い雰囲気。
お兄様は私から顔をそらし、うつむいた。サラサラの黒髪が肩をすべり落ちる。

いつもながら、なんて綺麗な髪だろう。天然パーマでおさまりの悪い私の髪と交換してほしい。
そんなことを思いながら、私はじつとお兄様を見つめた。

なんかお兄様、えらく沈んだ表情に見えるけど、気のせいだろうか。
「……おまえは、いつ知ったのだ？」

しばらくして、お兄様は小さな声で言った。
「え？」

「だから、わたしが……、いや、そもそもおまえは、なぜわたしたちが実の兄妹ではないと知っていたのだ？」

お兄様の言葉に、私は首を傾げた。

なぜここで突然、血縁関係の話？

だが、私はとりあえず答えた。

「いや、なぜって……、いくら私でも気がつきませよ。肖像画並べて見れば誰だってわかると思いますけど」

本当のことを言えば、前世の記憶があるから、お兄様と血のつながった兄妹ではないと知っていたのだが、しかし、もしその記憶がなかったとしても、遅かれ早かれ気がついたのではないだろうか。

歴代のデズモンド家当主の肖像画を見ると、髪の色は金茶か榛色でだいたい巻き毛、瞳は大きなたれ目で淡い緑か榛色、というのがずっと何十人も続くのに、そこに突然、サラサラの黒髪に切れ長の黒い瞳、という容姿が交じるのだ。

しかもお兄様は、騎士団でも一、二を争うほどの腕前だが、デズモンド家のその他男子は、皆一様にろくに剣も持てない文官ぞろいなのである。気づかないほうがおかしい。

「それにお兄様、魔力属性が闇と水ですけど、これもデズモンド家ではあり得ないですよ。お兄様以外、他はだいたい土属性ばかりで、あとは水と風がたまに出るくらいじゃないですか？」

ちなみに私は、土と水と風、三属性を持っている。

珍しいっちゃ珍しいけど、魔力量が少ないから、あまり意味はない。

私の言葉を、レイ兄様は黙って聞いていた。

そして、小さく笑って言った。

「……そうか。おまえは、ずっと前から知っていたのだな」

その姿が、なんだか寂しそうに見えて、私は動揺してしまった。

私でさえ気づくような事実だから、お兄様ならてつきりもつと前から知ってるものと思ひ込んでただけだ。

ていうか、小説の中のお兄様は、最初っから私と血のつながりがないことを知っていて、王太子に妹殺しをとがめられた際も「実の妹ではない」って平然と答えてただけだ。

しかし、小説と現実では、結果が同じでも、経緯は違うこともある。

もしかして、もしかすると……、お兄様、つい最近まで養子の事実を知らなかった？

それで、傷ついていた、とか……？

「お兄様、申し訳ございません！」

私は、膝をついてうつむくお兄様の手をとった。

「っ、マリア」

お兄様は、弾かれたように私を見た。お兄様の手が震え、私は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

そんな、まさかお兄様が知らなかったなんて、思わなかった。どうしよう、ショックだよね。

私は、震えるお兄様の手を、ぎゅっと握りしめた。

「本当に、本当に申し訳ありません。私、お兄様を傷つけるつもりは……」

次の瞬間、私はなぜかお兄様に抱きしめられていた。

「お、お兄様？」

「……マリア……」

レイ兄様がかすれた声で私の名前をささやいた。

かすれているせいか、無駄に色っぽい。腰が砕けそうだ。

状況を忘れ、私は一瞬、うっとりしかけたが、

いや、ちよつ、お兄様、力強すぎ！ めきめき音がして、骨折れそうなんですけど！

「お、お兄様、放してください」

私がかすと、レイ兄様ははっとしたように腕の力を抜いた。

「……すまない」

お兄様は私から顔を背け、立ち上がった。

「……このようなこと、すべきではなかった。謝罪する」

「えっ!？」

私はびっくりしてお兄様を見上げた。

お兄様が！ 謝った！

これっていつ以来？ 子どもの頃、ケンカして私を突き飛ばした時以来？

驚いている私をよそに、お兄様は私の顔を見ないまま、部屋のドアを開けて言った。

「もう部屋に戻れ」

「え？ ……あ、はい、わかりました」

なんかよくわかんないけど、今回のお説教、だいぶ短くない？

しかも最後、お兄様が！ 謝った！（大事なことなので二回言わせていただきました）

お兄様の気が変わらぬ内に、と私はそそくさとお兄様の部屋を後にした。

でも、なんだろう、気のせいだろうか。

なんかお兄様、様子がおかしかったような？